

ジンバブウェ再入植地域における生業と土地利用に関する研究

平成 19 年入学

参加したフィールドスクール：エチオピア

調査地：ジンバブウェ共和国

井戸 雄大

キーワード：再入植、土地利用、第 2 世代、農地拡大

自身の研究テーマ

南部アフリカに位置するジンバブウェでは、1980 年の独立以降国の政策として、農地の大部分を所有していた少数白人農家から土地を買い取り、環境の悪化が深刻なアフリカ人共同体地域に住む土地無層や、独立戦争時の退役軍人に土地を移譲するという再入植計画を実施している。この計画により、2004 年までに約 20 万世帯の人々が政府から土地を獲得し、それぞれこの計画の綱領に沿い、村落を建設し、運営している。このジンバブウェの再入植に関する研究の多くは政策的議論に偏っており、住民の生業活動などの地域的な研究は不足している。そこで本研究では、再入植計画がはじまり約 30 年がたった現在、この村落コミュニティがいかなるプロセスをたどり、現在にいたっているかということを利用して焦点を当て明らかにする。この研究により、ジンバブエの再入植の未来像の考察が可能であると考えられる。

本調査を終え、調査者の研究対象地域の再入植地の住民は、1980 年に村落が設立されて以来、それぞれの農地に隣接する共有地に農地を拡大していることが明らかとなった。その要因の一つとして、農業生産量を増加させるために、世帯主は近隣住民と婚姻関係を結び、労働力を確保すると同時に世帯人口を増加させたことがあげられる。しかし、現在この複婚による急激な人口増加により、第 2 世代の土地が不足している。そこで彼らは十分な土地を確保するために共有地内に第 2 世代村を新たに建築し、それぞれ独立して生活を行っていることが明らかとなった。このような未利用地への開墾は、放牧地の減少を招くことが予想され、再入植地の環境の悪化が懸念される。



写真 1 第 2 世代村の農地

フィールドスクールから得られた知見

エチオピアは、現在も多様な在来農法が各地で営まれている。本フィールドスクールでは、デラシャの人々が急峻な山岳地域で営むポータイタ農法を見学した。ポータイタ農法は、収穫した後のモロコシの茎を農地に格子状に並べることにより土壌侵食を防ぐと同時に、水分を農地に有効に蓄えることを目的とした農法である。この農法により、山の斜面でも農業が可能となり、平坦な土地が不足するこの地域の住民の生活を支えている。

しかし、近年モロコシの代わりにトウモロコシがこの地域で栽培され始めているが、住民は収穫した後のトウモロコシを格子状にならべ、ポータイタ農法を保持し、その変化にうまく対応している。トウモロコシは、ある一定の収量を上げようとする化学肥料が不可欠な作物であるので、今後トウモロコシの導入によりどのように住民が化学肥料という資金のかかる問題に対応していくのか注目される。



写真2：デラシャのポータイタ農法

フィールドスクールで得た知見をどのように研究テーマに生かすか

ジンバブウェは、現在暴力的な農地改革・不正選挙・経済政策の失敗により国際社会から孤立している。これにより多くの農村では、物資が不足しており、農業投入財などが不足している。投入財の不足により、満足な収量があげられず、農村では食糧不足に見舞われる年が続いている。

そこで近年ジンバブウェのマガジ村では、食糧不足に対応するために、庭畑を拡大し労働集約的な農業を行っている。それらの庭畑では、主食のトウモロコシの他、おかずとして使われるトマト、レイプ、ネギやバナナ、サトウキビやその他多様な果実が生産されている。それらの作物の畑には、主に家庭からでる灰、糞尿などの有機物が肥料として使われている。このような農民の行動は、現在の困難な状況下でうまく対応するものであると考えられる。



今後、本フィールドスクールで得た知見により、西欧近代農業が優勢なジンバブウェで続く在来農業に着目し、その優位性を実証し、アフリカ農業の可能性を再考していきたいと考えている。